

太鼓岩遺跡
古免南遺跡
原山窯址

——長野県小県郡丸子町太鼓岩・古免南・

原山窯址遺跡発掘調査報告書——

download

1986.3

長野県小県郡丸子町教育委員会

序

長野県浅間テクノポリス構想に基づき、丸子町では第三次丸子町振興計画がたてられ、全町の約70%を占める森林地帯を生かして、「工業・住宅団地」の造成が積極的に進められることになりました。丸子町教育委員会では、この「工業・住宅団地」造成工事計画に伴い、工事区域内の文化財の詳細分布調査を行うなど、文化財保護のための努力を続けてきました。

とくに、埋蔵文化財の保護については、長野県教育委員会のご指導により、事業主体である丸子町当局と協議を重ね、工事区域内にある塩川地区の古免南・太鼓岩・大岩の三遺跡は、本年度の工事に先立ち、発掘調査を行うことになりました。発掘調査計画はその後、工事計画の変更により、大岩遺跡の調査が次年度以降にくりこされることになりましたが、別に、依田地区で新たに原山窯址が発見され、調査対象に追加されました。

発掘調査は、丸子町教育委員会が事業主体者から委託を受け、「昭和60年度丸子町塩川地区埋蔵文化財発掘調査団」を組織し、実施することになりました。発掘期間中は真夏の炎天続きであり、さらに時間的な制約を受けていたにもかかわらず、精密かつ効率的に調査が進められました。これもひとえに調査団の犠牲的な熱意のたまものと、厚くお礼申し上げます。

おかげ様で、本報告書にみられるように、貴重な記録を残すことができました。中でも、原山窯址の資料は、この地方の古窯址群の解明に欠くことのできない貴重な資料であると聞き及んでいます。

なお、調査にあたっては、長野県教育委員会・(財)岐阜県陶磁器陳列館・東京大学・上田市国分寺資料館などの機関、檜崎彰一・倉田芳郎・宮石宗弘・林和男・山岸猪久馬・綿田弘実氏ら研究者のみなさんや、丸子町当局、丸子町南方区のみなさんなどに御協力をいただきました。また、昨年にひきつづき快く焼成試験に協力いただいた堀内正次氏も忘れることはできません。このように数多くの機関や人々の御協力があったからこそ、このような成果が得られたものと確信しております。厚くお礼を申し上げます。

昭和60年12月

丸子町教育長 吉池 欽郎

例 言

- 1 本書は、「長野県小県郡丸子町宮塩川工場・住宅団地造成工事」及び「同・原山工業団地造成工事」に先立って、昭和60年度に実施した、古免南遺跡・太鼓岩遺跡・原山窯址の発掘調査報告書である。
- 2 出土遺物の整理及び図版の作成は、竹内一徳と滝沢敬一が分担して行った。また、原稿は下記のとおり分担執筆し、編集は関孝一が中心になり行った。

竹 内 一 徳（第1章、第4章Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・第5章）

滝 沢 敬 一（第2章Ⅳ、第3章Ⅳ）

都 築 誠（第2章Ⅰ）

中 村 武 人（第2章Ⅱ）

佐々木 多四郎（第2章Ⅲ・1、第3章Ⅲ）

宮 沢 博 家（第2章Ⅲ・2）

清 水 啓 道（第3章Ⅰ）

川 村 寿 一（第3章Ⅱ）

井 上 良 子（第4章Ⅱ）

- 3 挿図の縮尺はそれぞれに明示してある。また、遺物図版中の番号は挿図中の番号と符合する。
- 4 この調査にあたっては、下記の方々及び諸機関からご指導とご協力をいただいた。ご芳名を記し、感謝の意を表したい。（アイウエオ順）
（機関） 上田市立国分寺資料館、（財）岐阜県陶磁器陳列館、東京大学文学部、長野県教育委員会、丸子町役場開発課、丸子町南方区
（個人） 倉田芳郎、櫛崎彰一、林和男、堀内正次、宮石宗弘、山岸猪久馬、綿田弘実

目 次

序	I
例言	II
目次	III
第1章 発掘調査の経過	1
1 発掘調査に至るまでの経過	1
2 調査団の構成	1
3 発掘調査日誌	2
第2章 太鼓岩遺跡	3
I 遺跡の立地	3
II 遺跡の状態	3
III 遺構	7
1 1号住居址	7
2 1号土壇	8
IV 遺物	9
1 1号住居址出土遺物	9
2 1号土壇出土遺物	10
3 その他の出土遺物	11
第3章 古免南遺跡	13
I 遺跡の立地	13
II 遺跡の状態	15
III 遺構	16
IV 遺物	20
1 土師器	20
2 須恵器	21
第4章 原山窯址	22
I 遺跡の立地	22
1 自然環境	22
2 歴史環境	23
3 依田窯址成立の背景	25
4 窯址付近の上の特性	27

II 遺跡の状態	28
III 遺構	29
IV 遺物	32
第5章 まとめ	40
1 太鼓岩遺跡・古免南遺跡	40
2 原山窯址	40

挿 図 目 次

第1図 太鼓岩・古免南遺跡付近の地形図	第12図 古免南遺跡1号ビット群
第2図 太鼓岩遺跡土層柱状図	第13図 古免南遺跡1号土壌
第3図 太鼓岩遺跡グリッド配置図	第14図 古免南遺跡出土遺物実測図
第4図 太鼓岩遺跡遺構配置図	第15図 依田付近の地質図
第5図 太鼓岩遺跡1号住居址	第16図 依田古窯址分布図
第6図 太鼓岩遺跡1号土壌	第17図 原山窯址実測図
第7図 太鼓岩遺跡出土遺物実測図	第18図 依田窯址群窯平面比較
第8図 太鼓岩・古免南遺跡付近遺跡分布図	第19図 依田窯址群窯断面比較
第9図 古免南遺跡土層柱状図	第20図 原山窯址出土遺物実測図(1)
第10図 古免南遺跡グリッド配置図	第21図 原山窯址出土遺物実測図(2)
第11図 古免南遺跡遺構配置図	

表 目 次

第1表 太鼓岩・古免南遺跡付近遺跡地名表	第2表 依田古窯址名一覧表
----------------------	---------------

図 版 目 次

PL 1	1. 太鼓岩遺跡遠景（西から）	2. 太鼓岩遺跡の中心（東から）		
PL 2	1. 1号住居址カマド付近	2. 羽釜出土状況		
PL 3	1. 1号土壌（南から）	2. 1号土壌土器出土状態（南から）		
PL 4	1. 土師器甕	2. 土師器高台付坏	3. 土師器羽釜	4. 土師器羽釜
	5. 土師器羽釜	6. 土師器坏	7. 土師器坏	8. 土師器坏
	9. 土師器坏	10. 土師器坏	（第7図）	

- PL5 1. 古免南遺跡遠景（東から） 2. 古免南遺跡全景（東から）
- PL6 1. 1号ピット群（北から） 2. 1号土壇（北から）
- PL7 1. 土師器（甕、坏） 2. 土師器高台付坏 3. 須恵器坏（第14図）
- PL8 1. 原山窯址全景（南から・発見時） 2. 原山窯址発掘風景（窯内清掃）
- PL9 1. 窯址完掘状態 2. 遺物出土状態 3. 遺物出土状態
- PL10 1. 焼成試験試料土（粉碎後の状態） 2. 焼成後の状態（縮小状態） 3. 焼成後の状態（へたり率） 4. 焼成後の状態（不純物の吹き出し） 5. 甕1 6. 甕2 7. 甕3 8. 甕4
- PL11 1. 甕胴部（平行叩き目・無文） 2. 甕（4形態） 3. 盤（高台部—基本的な2形態） 4. 盤底部（7形態） 5. 坏蓋（器形3形態） 6. (上)盤 7. (下)坏蓋 8. 坏蓋（宝珠のパリエーション5種） 9. 坏蓋（最も多いタイプ）
- PL12 1. 小型坏底部（2形態） 2. 大型坏破片 3. 坏底部（ヘラ切り） 4. 坏底部（糸切り） 5. 隆帯をもつ胴部破片 6. 底部破片（器種不明） 7. 坏蓋の胎土2形態・緻密 8. 同・雑

第1章 発掘調査の経過

1 発掘調査に至るまでの経過

自然と文化を生かしたかおり高い林間工業都市を造ろうとする丸子町振興計画に添って、丸子町の東北部、塩川地区南方地域に「南方工業団地・住宅団地」、西方部の依田地区南原地域に「原山工業団地・南原工業団地」が相次いで造成されることになり、昭和59年12月14日、丸子町教育委員会で工事区域内の埋蔵文化財の詳細分布調査を実施したところ、「南方住宅団地」区域内に、古免南・太鼓岩・大岩遺跡が、「南原工業団地」区域内に、新原田新開窯址が所在し、「南原・原山工業団地」双方の区域内には、未知の窯址の存在する可能性のあることが確認された。

そこで、開発主体である丸子町役場開発課及び長野県教育委員会文化課と、それぞれ協議したところ、昭和60年度に200万円の予算で、古免南・太鼓岩・大岩遺跡の発掘調査を実施すること、既に発掘調査が完了している新原田新開窯址については、工事に伴う立ち会い調査を実施すること、新窯址発見の折には協議のうえ緊急発掘調査を実施することなどが定められた。

その後、昭和60年度になって、工事の進行の関係で大岩遺跡の発掘調査及び新原田新開窯址の立ち会い調査が次年度以降に延期されることとなったが、かわりに原山工業団地造成区域内で新たに原山窯址が発見され、当初予定した200万円の予算で古免・太鼓岩遺跡及び原山窯址の発掘調査を実施して記録保存することとなり、発掘調査に伴う経費は事業主体者である丸子町役場が負担し、事業主体から委託を受けた丸子町教育委員会が発掘調査団を組織し、調査を実施することとなった。

調査は事業主体側の工事計画や、調査員・作業員の集まれる時期を考慮し、7月に実施した。調査に至るまでに、昭和60年4月3日に事業主体との協議を実施したほか、文化財保護法第57条の2第1項の規定による事業主体の届出を5月15日付で、同法98条の2第1項の規定による通知を6月18日付の教育委員会文書で行った。また、6月1日には事業主体と教育委員会、教育委員会と発掘調査団間の委託契約を締結した。

2 調査団の構成

発掘調査に先立って編成された昭和60年度丸子町塩川地区埋蔵文化財発掘調査団は次のとおりである。

〔調査団〕 (アイウエオ順)

参 与 五十嵐幹雄、児玉卓文、小林重義、塩入秀敏

団 長 関 孝一

調査主任 滝沢敬一

調査員 青池 修、井上良子、川村寿一、北沢けさ子、佐々木多四郎、清水啓道、竹内一徳、
塚越安廣、都築 誠、中村武人、宮沢博家

作業員 (一般) 杉本健一、滝脇ちえみ、土屋 隆、西沢茂治、西沢 正、山浦市治
(高校) 乾 保彦、北沢 要、小平光一、小林和弘、小峰克之、坂口哲夫、清水朝
子、杉本 誠、田中雅章、土田勝典、樋口正彦、深井英敏、堀内幹夫、堀之内裕次
〔事務局〕

事務局長 堀内恵明

事務局員 竹内一徳

〔監査員〕

大沢 馨、依田行安

3 発掘調査日誌

- 7月5日(曇)午後雨 原山竈址発掘準備(器材運搬・グリッド設定)。竈址下部のものと思わ
れる遺物が人工的に開削された谷の対岸に散乱しており、その散乱遺物を採集。竈址付近
の地形図を作成。
- 7月6日(晴) 発掘開始。前日の雨のため遺跡の状態が悪いが、発掘を進めるに従い、竈址
下部の大部分が大型重機にて削り取られていることが判明。午後5時完掘。写真撮影と測
量を同時進行させる。午後6時、関団長現場に到着。
- 7月13日(雨) 発掘調査団会議。
- 7月15日(晴) バックホーによる古免南遺跡表土はぎ。長雨による湧水が極めて多く排水作
業を同時に進行。
- 7月16日(晴) 古免南遺跡排水作業とあわせ、古免南遺跡・太鼓岩遺跡のグリッドを設定。
- 7月21日(晴) 器材運搬。
- 7月25日(晴) 午前8時30分、吉池教育長を南方公民館に迎え結団式。太鼓岩遺跡から発掘
着手。
- 7月26日(晴) 太鼓岩遺跡の発掘調査を継続。午後一部調査員・作業員を古免南遺跡に投入、
発掘開始。
- 7月27日(晴) 古免南遺跡の発掘に主力を投入。一部は太鼓岩遺跡の掘り下げを完了。併行
して写真撮影と実測作業を実施。午後6時完了。
- 7月28日(晴) 古免南遺跡の掘り下げ完了。併行して写真撮影と実測作業を実施。また一部
は丸子町公民館において遺物洗いに着手。

7月29日(明)晴れ 全員遺物洗い及び注記・復元作業に着手。
7月30日(火)晴れ 遺物洗い及び注記・復元作業を継続。
7月31日(水)晴れ 遺物洗い及び注記・復元作業を継続。
8月1日(木)晴れ 本日をもって遺物洗い及び注記・復元作業を終了する。
8月2日(金)～ 報告書の執筆分担を決め、各自それぞれに作業及び執筆を継続する。
12月22日(土)晴れ 報告書編集会議。

第2章 太鼓岩遺跡

I 遺跡の立地

太鼓岩遺跡は、丸子町大字塩川字太鼓岩に所在する。丸子町の平野部の中で、最大の広さを誇る塩川面南端に展開する南方集落を出て、塩川沢添いに北へ、少し山地をわけ入ったあたり、高位の隆起性高原台地、藤原田面より流下する塩川沢最大の支流・郷尻沢と、塩川沢本流（地元では郷尻沢合流点上流の本流を大沢と呼称する。）の合流点を望む北向きの舌状台地上にあり、極めて良好な居住条件を備えているといっても過言ではない。

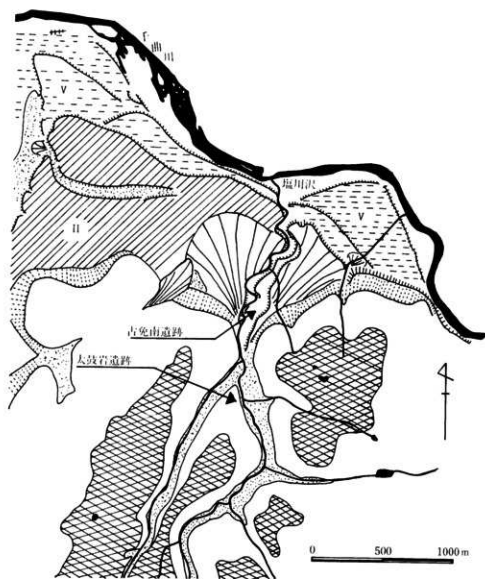
眼下を流下する塩川沢は、全長52km、流域面積8km²の、丸子町の平野部に流下する沢では最長・最大のもので、その本流は藤原田面南部の標高720m付近に展開する隆起性高原台地八重原面北縁部の分水嶺から流下するが、本流・郷尻沢とも、乏水性のサバンナ式原野を水源地域としており、沢の大きさに比して水量は少ない。

そのため、塩川沢の灌溉能力は極めて低く、遺跡下流に展開する塩川面上の条里水田、丑田原面の水田化には、依田川からの導水を図らねばならなかったのであるが、いずれにしても塩川沢は、乏水地帯であるこのあたりで常時水を供給する貴重な沢であったことは確かで、塩川沢の本・支流に添って幾多の遺跡が存在する。

この太鼓岩遺跡も古くから知られていた遺跡の一つで、詳細分布調査の結果、遺跡の中心は今回工事に伴って発掘調査した地点の北方、工事除外区域に展開すると考えられる。また、この遺跡は従来、先人たちにより命名された大岩遺跡名称で呼称されてきたが、遺跡が字太鼓岩地籍にあり、大岩地籍にも別の遺跡が存在することから、今回、太鼓岩遺跡と名称を変更することとした。（第1図参照）

II 遺跡の状態

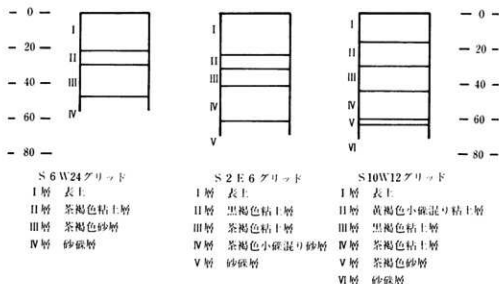
太鼓岩遺跡は塩川沢本流と郷尻沢の合流点にむかい突出した舌状台地上に存在するが、今回発掘調査をしたのはその末端、台地上に中心をもつと考えられる遺跡の北縁部であった。



凡例

堤防	段丘岸	扇状地
崖線	低湿地	第II段丘面
第V段丘面	古地	山地

第1図 太鼓岩・古免南遺跡付近の地形図



第2図 太鼓岩遺跡土層柱状図

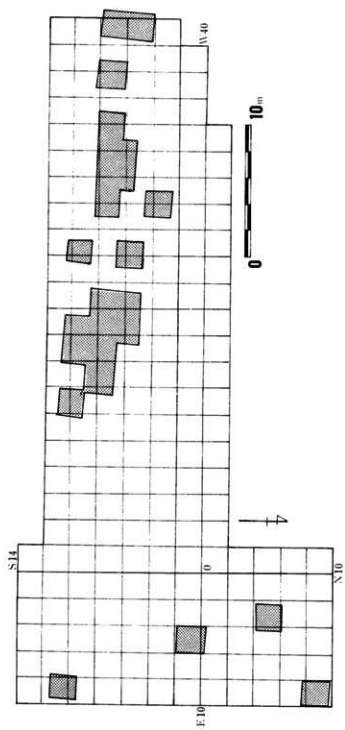
台地を縦断し農道を通じるが、この農道は県道芦田・大屋停車場線開通以前の主要道であり交通の便のよい遺跡付近はそのため古くから畑耕作が盛んに行われ、現在では野菜作りのほかこの地方の主要農産物である薬用人参栽培も行われている。遺跡内でも薬用人参栽培が行われた形跡があり、地表下数10センチまで深耕する人参栽培に伴う遺跡破壊が心配された。

さて、本調査に先立って実施した試掘調査結果と、現地の地形などから想定した遺跡範囲は、工事除外地域北端にある人参小屋直下の農道西側にある比較的平坦な畑と、農道の東側の東半分がゆるやかに塩川沢本流方向に傾斜している畑にかけて、東西約50m、南北約10mの範囲内であった。

農道東側の畑は、遺跡の地山面である礫層が高く、遺物包含層である黒色土層もほとんどみられないうえ、遺物もまったく検出できないことから、4つのグリッドをあげ、土層確認と遺跡範囲外であることの確認をするに留めた。

また、農道西側の畑については、前述したように人参耕作による影響が考えられたが、既に試掘時に遺構らしきものの存在が確認されていたので、重点的に調査を実施した。農道を隔てた東・西の土層には大きな異なりが見られ、その詳細は第2図のとおりである。

精査の結果この地域からは、カマド跡をもった住居址1軒、土壇1カ所が検出されたが、予想どおり人参耕作による攪乱があり、詳細は遺構についての記述に譲るが、人参耕作に伴う暗きも遺構面以下にまで掘りこまれているなどして、その影響はまことに大であった。



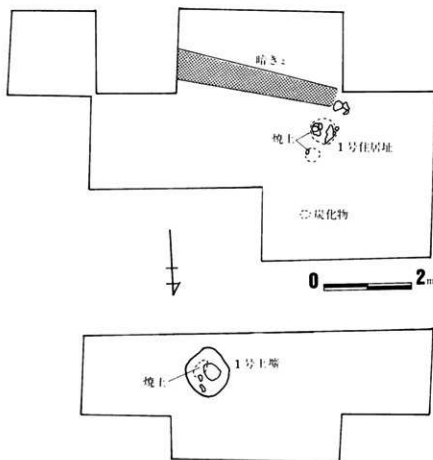
第3図 大船岩遺跡グリッド配置図

III 遺 構

本遺跡で検出された遺構は、住居址1軒、土壇1基である。また、その他の遺構としては、極端に水をきらう薬用人参栽培にともなうものとしての暗きょが検出された。

1 1号住居址

S10W20、S8W20グリッドにまたがり、土器を伴う自然石、土器と自然石を伴う直径約60cmの円形の焼土、土器を伴う直径約35cmの焼土が、南西から北東に、一直線に並んで検出された。ここから出土した土器はすべて羽釜の破片で、自然石の配置や羽釜、焼土のあることから、カマド跡であろうと考えられる。また、さらに北側約1mのところには、直径約20cmの円形状の炭化物の集積もみられた。



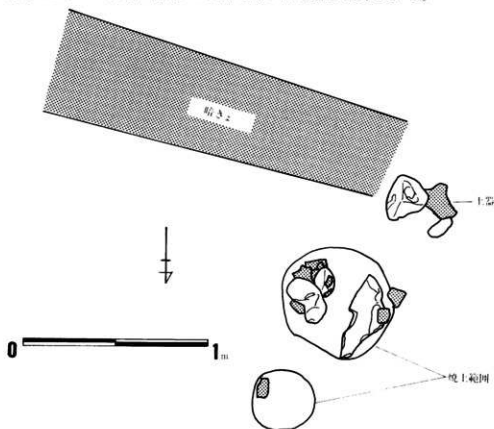
第4図 太鼓岩遺跡遺構配置図

遺構面は地表下約30cmのところにあるが、人参耕作に伴う攪乱が随所に見られ、また遺構のすぐ脇まで暗きょが設けられるなど、極めて保存状態が悪く、カマド跡を中心にグリッドを拡張し住居址の検出につとめたが、プランや柱穴などの検出はできなかった。なお、遺構検出地点は調査区域の南縁にあたり、直上に比高差約30cmの人工の微段丘をもって、工事除外区に属する薬用人参畑が広がり、遺構南側の確認には制限があった。

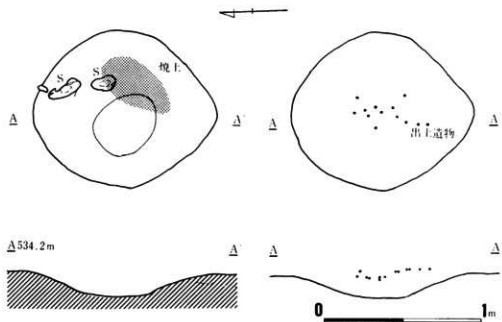
2 1号土壌

本遺跡で唯一の土壌は、S 8 W30・S 8 W32グリッドにまたがって検出された。不整楕円形を呈し、長軸115cm×短軸100cmであった。底部はほぼ平らで、壁際よりゆるやかに傾斜し、深さは16cmであった。また、土壌東側の床面には、50cm×27cmの卵形の焼土が見られた。

遺物はすべて土師器で、13個体存在し、坏・高台付坏・甕がある。坏の完形が2個体、ほぼ完全な坏が2個体、それに高台付坏破片の上に重なるように甕破片の出土が見られた。これらの遺物は土壌のほぼ中央部に南北にみられ、土壌のやや上層部に集中していた。



第5図 太鼓岩遺跡1号住居址



第6図 太鼓岩遺跡1号土溝

IV 遺 物

本調査で出土した遺物の総量は、破片も含めて整理用平箱3箱程度であるが、遺構数の割には比較的多く出土しており、暗渠による攪乱のためほとんどが耕作土中から出土している。また、遺構に伴って出土した遺物は、原形をとどめているものが多く、平安時代の土師器が主体を占めている。その他、耕作土中より同時期の遺物が出土しているが図示できるものは少ない。これらの遺物を遺構ごとに、またその他の遺物は一括して述べていきたい。

1 1号住居址出土遺物

本住居址から出土した遺物は、土師器（甕・高台付坏・羽釜）のみであり、すべて平安時代に属するものである。

甕（第7図1、PL4）

1は胴上部から口縁部が遺存する。口縁部は緩く外反して端部に至り、端部は丸い。明瞭な肩部をもたず、なだらかに胴部に移行する。胴上部に張りをもつ器形である。口縁部は内外面とも回転ナデ調整され、胴上部はへら削りの後回転ナデ調整を行い、胴下部はへら削りが施されている。この特徴は善光寺平第5様式古段階にみられ、平安時代に位置づけられると思われる。

る。

高台付坏（第7図2、PL4）

2は底部のみ遺存している。底部と体部の境界に比較的高く厚みのある高台を付し、端部は丸い。底部の中心に段をもち、回転イトキリされている。整形は外面が回転ナデ調整が施され、内面はヘラミガキされ、黒色処理されている。

羽釜（第7図3～5、PL4）

口径が広く、大きな罎をもつA類（3・4）と、口径が比較的狭く、小さな罎をもつB類(5)の2形態があり、A類のほうが器肉が厚く、整形もていねいな傾向がみられる。3は口縁部から胴上部まで遺存する。口縁部は、わずかに外傾して端部に至り、端部は丸い。罎は口縁端部から4cm程下がった所に貼付されており、断面形は三角形を呈する。外面の整形は、口縁部から罎の上面までヨコナデされ、罎の下面は縦のヘラケズリの後、粘土紐を貼付してヨコナデを施し、胴部は粗いヘラケズリを行っている。内面は口縁部から5cm位までヨコナデがされている。4は口縁部から胴上部の一部が遺存している。口縁部はやや内湾して立ち上がり端部に至っている。罎は3に比べてやや上部につけられ、断面形は三角形を呈する。外面の整形は基本的に3と同じだが、罎の下面に横のヘラケズリがなされていることと、胴部のヘラケズリの幅が3より狭い点が異なる。また、罎の下部と胴部との継ぎ目のはっきりしている。内面はヨコナデされ、口縁部付近に煤が付着している。

5は口縁部と胴上部の一部が遺存している。口縁部はやや内湾ぎみに立ち上がり端部に至る。端部は丸いが、所々へこんでいる。罎はA類の4と同じ位の所につけられているが、形状はまったく異なり、細い粘土紐を貼附して指頭によって押えながら作っており、断面形は端部の丸い長方形を呈する。また、罎の上部と下部に指頭圧痕の凹みができている。外面は口縁端部から罎の下面まで粗いヨコナデを施し、胴部は罎の5cm程下から粗いヘラケズリを行っている。内面は口縁部付近のみヨコナデが施されている。類例が善光寺平第5様式新段階にみられ、A類の3点も含めて平安時代末期に位置づけられると思われる。

2 1号土壌出土遺物

本土壌から出土した遺物は土師器坏・高台付坏・甕などであり、いずれも平安時代に属するものと思われる。

坏（第7図7～12、PL4）

坏は6個体出土している。7は平底の底部からやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁部に達する。体部は外面がヨコナデされ、内面はヘラミガキが施され、黒色処理されている。底部は回転イトキリされている。8は底部付近が遺存している。平底の底部から外傾して立ち上がり、段をつくってやや内湾ぎみにゆるく立ち上がる。器肉は底部付近の割には薄い。体部の整形は1と

同じで内面はヘラミガキされ、黒色処理されている。底部は回転イトキリの後ヘラケズリされている。9はほぼ完形であり、全体に器肉は厚い。平底で小さな底部から内湾して立ち上がり、口縁部に達する。全体にロクロ成形がなされており、器形はやや傾いている。体部は内、外面ともヨコナデされ、内面の底部に一部煤が付着している。底部は回転イトキリされている。

10は、平底の比較的大きな底部から内湾ぎみに立ち上がり、口縁部でやや外反して端部に達する。器肉は全体に薄い。体部は内外面ともヨコナデされている。底部は回転イトキリされている。11は口縁部の欠損している。比較的小さな平底の底部から内湾ぎみに立ち上がり、口縁部でわずかに外反して端部に達する。体部は内、外面ともヨコナデされ、内面の底部中央にロクロ成形時にできた突起がみられる。底部は回転イトキリされている。全体に器肉は薄く、成形は丁寧である。内、外面の広い範囲に煤が付着している。12は完形である。全体に器高が低く、浅い器形である。小さな平底の底部から外反して立ち上がり、体部中央よりやや上に段をもち、口縁部に達する。口縁部はゆがんでおり、全体に器肉は薄い。体部は内、外面ともヨコナデされ、11と同じように内面の底部に突起がみられる。底部は回転イトキリされている。

以上、坏はいずれもロクロ成形によってつくられており、平安時代に属すると思われる。

高台付坏（第7図13、P.L.4）

13は底部付近の一部が遺存している。底部と体部の境界より外側に張り出す高台を付しており、内端面で接地する。体部は外面がヨコナデされ、内面もヨコナデされ、黒色処理されている。底部は欠損しており不明であるが、回転イトキリされていると思われる。

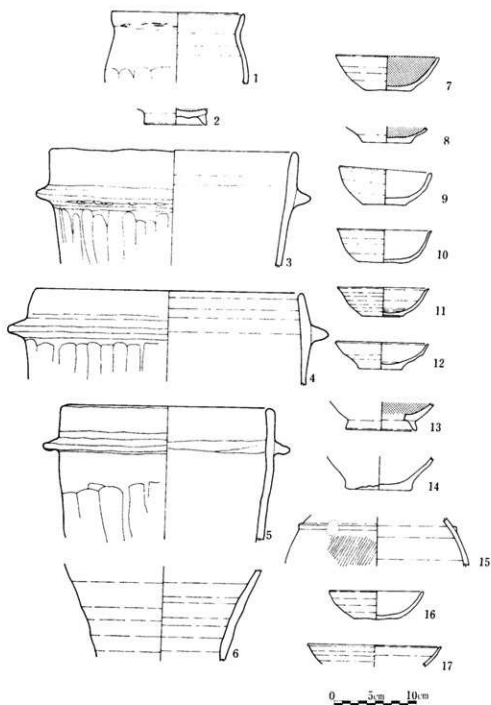
甕（第7図14・6、P.L.4）

14は底部付近の一部が遺存している。小さな平底の底部からやや内湾ぎみに立ち上がる。体部は外面がヘラケズリされ、内面は荒れている。器肉は比較的薄く、胎土に大きな砂粒を多く含んでいる。6は甕の口頸部付近と思われる。頸部から外反して立ち上がり口縁部に達する。内外面ともヨコナデされている。

3 その他の出土遺物

須恵器・四耳壺（第7図15、P.L.4）

本遺跡からの須恵器の出土量は非常に少なく、全体で5点出土したのみである。いずれも表面採集によるものであり、図示できるものは1点のみである。15は四耳壺と思われる。肩部から胴上部の一部が遺存している。肩部からなだらかに胴部に移行しており、明瞭な肩をもたない。肩部に細い一条の隆帯をめぐらしており、隆帯の断面形は台形を呈する。また、隆帯の一部に丸くえぐられた箇所があり、おそらく装飾のための把手がつけられていたと思われる。外面は肩部と隆帯がヨコナデされ、胴部は平行タタキ目が行われており、内面はヨコナデされている。長野県下では佐久市休石遺跡、信州新町水内齊宮遺跡などに類似がみられる。時期は11



第7圖 太鼓岩遺跡出土遺物実測図

世紀に属すると思われる。

土師器・坏（第7図16、P.L4）

耕作土中より1点出土している。2は全体の $\frac{1}{2}$ が遺存している。平底の底部から体部がやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁部に達する。体部は内、外面ともヨコナデされている。底部は回転イトキリされている。

白瓷・碗（第7図17、P.L4）

表面採集によって2点発見されている。小破片のため図示できるのは1点のみである。17は口縁部の一部が遺存している。碗の口縁部と思われる。体部から内湾ぎみに立ち上がり、口縁部に達する。灰白色の緻密な胎土をもつ。時期は平安時代に属すると思われる。

第3章 古免南遺跡

I 遺跡の立地

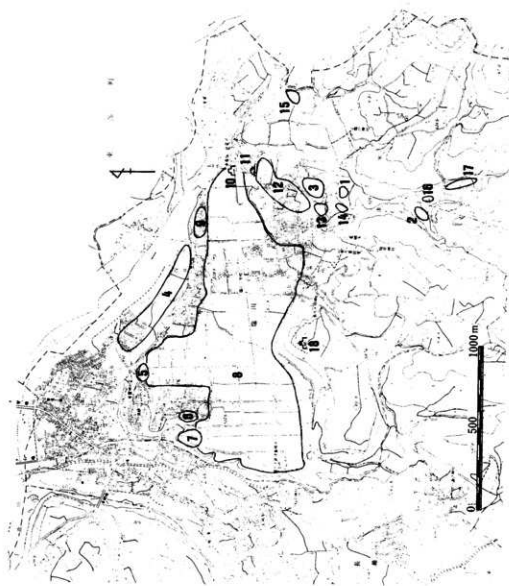
古免南遺跡は長野県小県郡丸子町大字塩川字古免に所在する。遺跡の西北にかけて塩川沢が流下するが、遺跡付近の塩川沢は、千曲川の形成した第II段丘面の塩川面（塩川沢左岸）・丑田原面（同・右岸）上に自ら作った塩川扇状地を下刻回春し、幅100mにも及ぶ大峡谷を作り、峡谷内を蛇行しながら千曲川に至る。

この峡谷内には2段の河岸段丘が存在し、段丘面上には藤森塚古墳を始めとする遺跡が点在して、今回発掘調査を実施した古免南遺跡もこの段丘面上（高位の第I段丘面上）である。

遺跡北方は比高差約10m内外の崖で大湾曲した塩川沢に接し、西方は比較的ゆるやかな傾斜をもって塩川沢に接する。また東方は、2段に連なる高原性隆起台地、藤原田面・八重原面に連続する山地で、山地下方は崖斜面になっており、その直下を上堰の末流が流れる。南方は古免南遺跡の連続面であるが、遺物の散布はまったく見られない。

古免地籍には今のところ2カ所の遺跡の存在が知られており、北部の古免遺跡は塩川地区でも有数の大遺跡の一つである。古免南遺跡と古免遺跡は、塩川沢の湾曲部及び微段丘によって隔てられており、当初同一の遺跡となる可能性もあったため一括して扱っていたが、今回呼称をかえ分離した。

遺跡付近は耕作に伴う多少の人工の手も加えられており、はなはだ複雑な微地形が見られるが、いずれにしろ遺跡は塩川沢に隣接する微高地に存在しており、乏水地帯である塩川地区の中において絶好の居住条件を備えていたといえよう。



第 8 圖 太龍站・古免兩遺跡付近道路分布圖

第1表 太鼓岩・古免南遺跡付近遺跡地名表

番号	遺 跡 名	種 別	遺 構 ・ 遺 物
1	古 免 南 遺 跡	集落址	(今回調査)
2	太 鼓 岩 遺 跡	集落址	(今回調査)
3	古 免 遺 跡	包蔵地	(縄)勝坂式土器、石鏃、打石斧、磨石斧 (平)土師器、須恵器
4	井 戸 下 遺 跡	集落址	(古)堅穴住居6、土壇、土師器、須恵器、滑石製紡錘車、小玉、鹿角(昭41発掘)
5	稲 羽 北 遺 跡	集落址	(縄)石鏃、打石斧 (弥)箱清水式土器 (奈・平・中)堅穴住居5、ビット群3、土壇墓2、土壇10、土師器、須恵器、灰釉陶器、羽口、銅鉄
6	稲 羽 西 遺 跡	包蔵地	(一)土師器、須恵器
7	市 の 町 遺 跡	集落址	(縄)早・中期土器 (古・奈・平・中)堅穴住居3、ビット群8、土壇18、溝3、列石1、集石1、土師器、須恵器、国産陶器、中国青磁、白土 (近)国産陶磁器
8	塩川条里的遺構	水田址	(昭51～53、昭59調査)
9	羽 毛 田 遺 跡	包蔵地	(縄)石鏃 (一)土師器、須恵器
10	柴 宮 砦	城 址	(中)
11	藤森塚古墳	古 墳	(古)円墳(径13、高3.1m)、横穴式石室(長6.5、幅1.5、高1.7m)
12	松 葉 遺 跡	包蔵地	(縄)加曾利E・型/内式土器、磨石斧、石鏃、石匙 (平)土師器、須恵器 (中)内耳土器
13	東 畑 遺 跡	包蔵地	(縄)中期土器、石棒 (一)土師器、須恵器
14	道 祖 神 遺 跡	包蔵地	(縄)中期土器 (一)土師器、須恵器
15	丑 田 原 遺 跡	包蔵地	(縄)土器 (一)土師器、須恵器
16	大 岩 遺 跡	包蔵地	(縄)石鏃 (平)土師器、須恵器、灰釉陶器
17	白 山 沢 遺 跡	包蔵地	(縄)土器、石鏃 (平)土師器、須恵器、灰釉陶器
18	陣 場 砦	城 址	(中)

II 遺跡の状態

古免南遺跡は、北流する塩川沢が形成した高位の河岸段丘面上に存在するが、本調査に先立って実施した詳細分布調査及び試掘調査の結果をふまえて想定した遺跡範囲は、塩川地区南方集落の南はずれから塩川沢を渡り古免地籍に通じる農道の北側、南北約50m、東西約60mの範囲内であった。

付近は甚だ複雑な地形をもち、しかも古くから耕作が進んでおり、畑や水田造成に伴う人工の微段丘が随所に見られることから、調査区の設定には困難を極めたが、調査区設定に際して実施したトレンチによる再確認の成果もあり、想定した遺跡範囲のほぼ中央の微高地に、東西

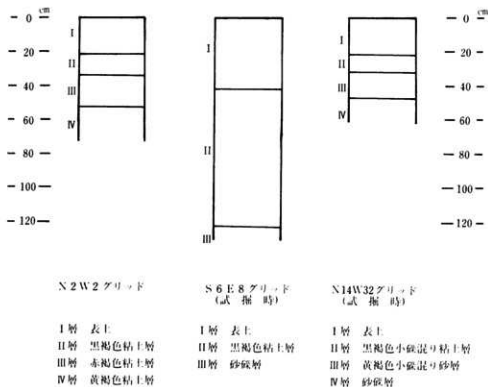
方向に長い調査区を設定した。

遺跡内の土層は、第9図のとおりであるが、西方に行くに従い端的に地山面が高くなり、塩川沢に近い西側に自然堤防が形成されていたことが想像される。調査区西縁の地山面は、実に地表下30cmという深さであった。

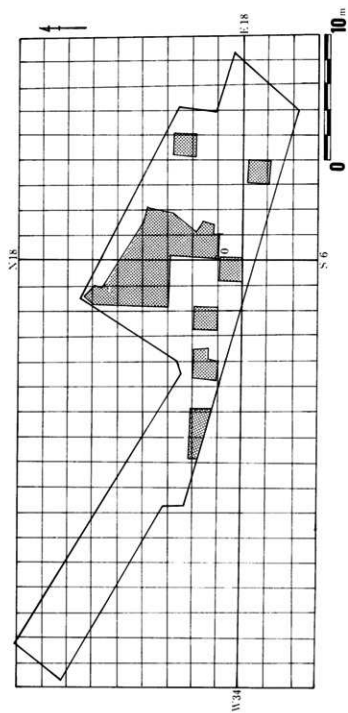
さて、調査に際してはバックホーを投入して表土を除去し、そこから更に掘り下げた。しかし、遺跡付近では地表下数十センチまで深耕をする薬用人参栽培が盛んに行われており、遺跡への影響が心配されていたが、予想どおり遺物包含層はもちろん、調査区西側においては地山面にいたるまで、随所に攪乱が見られた。

III 遺 構

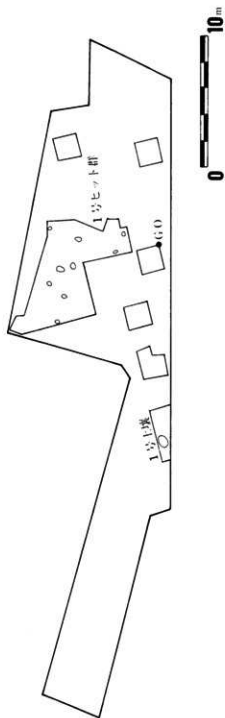
本遺跡において検出された遺構は、土壌1基とビット群であった。これらの遺構に伴う伴出遺物はまったく見られず、これらの遺構それぞれの時期推定はもちろんのこと、土壌とビット群の関連を推定することは不可能であった。



第9図 古免南遺跡土層柱状図



第10図 古免南遺跡グリッド配置図



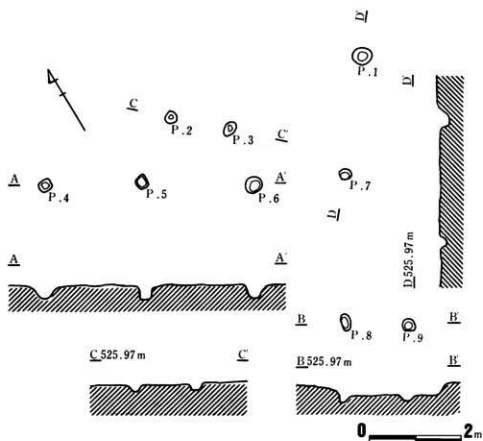
第11図 古免南遺跡通観配置図

1 ビット群

調査区の中央東、N10W4・N10W2・N8W2・N8E2・N8E4・N6E2・N4E2グリッドにわたり、9基のビットが発見された。これらのビットには便宜上、北から1号～9号(P₁～P₉)の番号を冠したが、P₄～P₇及びP₁・P₇・P₈はほぼ直線上に並んでおり、P₄～P₇を結ぶラインとP₁・P₇・P₈を結ぶラインとは、ほぼ直角に交わる。また、P₈・P₉を結ぶラインはP₄～P₇のラインとはほぼ並行で、P₁・P₇・P₈のラインとはほぼ直角に交わる。この配列からP₁・P₄～P₇、P₈・P₉は、ほぼ1軒の建物と識別してもよからう。

P₂・P₃のビットのみは、他の7基のビットと配列を異にし、柱穴であることは確実であるが、その性格は不明である。

ビット群に伴う伴出遺物はなく、また現状から建物の規模や形状、時期や性格を判断するこ



第12図 古免南遺跡1号ビット群

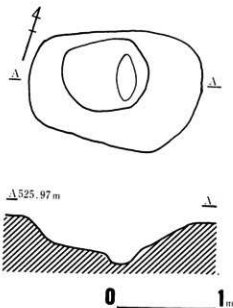
とはまったく不可能であった。

2 1号土壇

調査区の中央部西、N4W16グリッド北側付近に位置し、東西方向に長い隅丸長方形を呈し、長軸180cm×短軸115cmであった。深さは35cmであるが、内部に南北方向の46cm×20cmの楕円形ピットが掘り込まれ、最深部は46cmであった。出土遺物はまったくなかった。

IV 遺物

本調査で出土した遺物の総量はごくわずかで、破片の状態で整理用平箱1箱程度である。本遺跡は後世に擾乱をうけた形跡があり、遺物は遺構から出土したものは少なく、表面採集によるものがほとんどである。また、小破片が多く、図示できるものは少ない。時代的には、平安時代～鎌倉時代に属するものがほとんどである。したがって、挿図の配列については遺構単位ではなく遺物本位を行うこととした。



第13図 古免南遺跡1号土壇

1 土師器(第14図1～5、PL7)

本調査で出土した土師器は平安時代に属するものである。

甕(第14図1、PL7)

甕は1号ピット群の中から1点出土している。1は口縁部の一部が遺存している。やや外反ぎみに立ち上がり、口縁部で内側に折れて端部に達し、先端はとがっている。外面はヨコナデされ、内面もヨコナデされ、黒色処理されている。この口縁部の特徴に似た口縁をもつ須恵器の甕が、丸子町市の町遺跡から出土しており、須恵器の模倣をしたものと思われる。時期は平安時代に属するものと思われる。

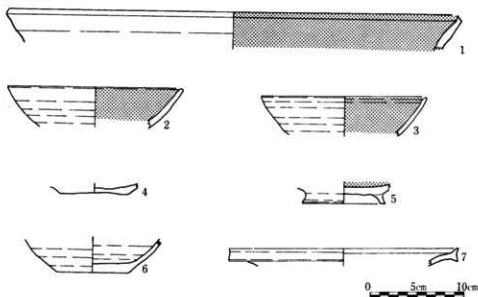
坏(第14図2～4、PL7)

総数3点のうち2点は1号ピット群からの出土で、1点は表面採集によるものである。2は口縁部の一部が遺存しており、全体に器肉は厚い。やや内湾ぎみに立ち上がり、口縁部に達している。内、外面ともヨコナデされ、内面はさらに黒色処理されている。3も口縁部の一部が遺存しており、2と同じ特徴をもつが、2と比べて器肉は薄い。4は底部が遺存している。平底の底部で、器肉は薄い。外面は回転ヘラキリされており、内面はヘラミガキされ、黒色処理

されている。これらの坏は平安時代に属するものと思われる。

高台付坏（第14図5、PL7）

表面採集により1点のみ発見されている。5は底部と体部の一部が遺存している。体部がゆるやかに立ち上がる。底部は平底を呈する。底部と体部の境界に外反する高台を附しており、内端面で接地する。外面はヨコナデされ、内面はヘラミガキされ、黒色処理されている。底部は回転イトキリされていると思われるが、磨耗しており明確ではない。おそらく平安時代の所産と思われる。



第14図 古免南遺跡出土遺物実測図

2 須恵器（第14図6～7、PL7）

坏（第14図6、PL7）

表面採集により6点発見されているが、微小破片が多く図示できたものは1点のみである。6は底部と体部の1/5が遺存している。平底の底部から体部がゆるやかなカーブを描いてやや内湾ぎみに立ち上がる。内、外面ともヨコナデされている。全体に器肉は薄い。底部は回転イトキリされている。平安時代の所産と思われる。

臺（第14図7、PL7）

1号柱穴群から1点出土している。7は長頸壺の口縁部付近と思われる。口頸部は外反して立ち上がり、口縁端部付近で水平方向に屈曲して鋭い稜をなし、さらに短く直立して端部に至る。端部はとがり、鋭く内側に内傾して稜線を有する。平安時代の所産と思われる。

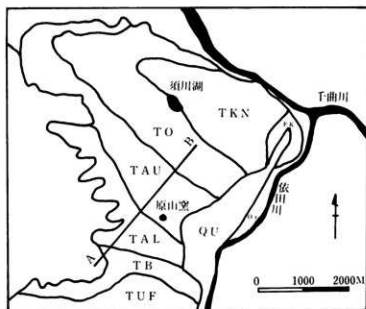
第4章 原山窯址

I 遺跡の立地

1 自然環境

原山窯址は丸子町の西北部の丘陵状の山地、日向山々塊^{ひなたやまさんかたい}の北端、上田市塩田地区（旧・小県郡塩田町）と丸子町依田地区^{よだ}を結ぶ県道別所丸子線^{べつしよまわりせん}の南側山腹に存在する。窯のすぐ近くには二ツ木・久保両峠から東流して依田川に入る、依田地区で最大・最長の原沢が流れており、県下有数の乏水地帯であるこの地域でも容易に水を得ることが可能である。

この原沢の対岸・北側は、原山窯址の属する日向山々塊より高く広い小牧山塊の南端部で、裾野の広い山腹を、大洞・田ノ入・宮ノ入などの支流が南流して原沢に合流する。これらの



- 第3紀・中新世
 TO 小川層
 TAU 青木層(上部)
 TAL " (下部)
 TB 別所層
 TUF 富士山層
 第3紀・鮮新世
 TKN 梨平層
 第4紀
 Or 旧河床砂層
 Qu 土田層
 烏帽子火山群
 EK 小諸凝灰岩層



第15図 依田付近の地質図

谷々はすでに埋積谷をなし、山地も著しく低夷化して老年相を呈する。沢の浸食営力はすでになく、逆に回春して自ら造った埋積谷を下刻し、田切地形を形成しているといえよう。

西方の龍顔寺の存在するところが小牧山塊の最突出部であるが、これより上流の水はすべて原沢に流下するので、この上流部を「原沢谷」と呼んでいる。原沢谷兩岸の山腹には、大小様々、9つの溜池が造られており、乏水地帯で水を有効利用しようと努力した先人の苦勞のあとがしのばれる。

日向山々塊、小牧山塊とも、第3紀層に属する土山で、ことに原沢谷付近は昔から良質な粘土を産するところとして知られてきた。この付近の地質は青木累層に属し、砂岩・泥岩・礫岩層から構成されるが、地表面は風化が進み、強粘土地帯となっている。

2 歴史環境

瀬戸や美濃地方を連想させるなだらかな丘陵地帯に存在する原沢谷付近は、遺跡の分布密度が高い依田窪地方の中でも、比較的遺跡の少ないところといえよう。この原沢谷付近は、依田地区の重要な水源地帯ではあっても、山は松茸のよく生育する赤松の多い荒れ山であり、直接人々が居住するには都合のよい場所とは思えないのである。

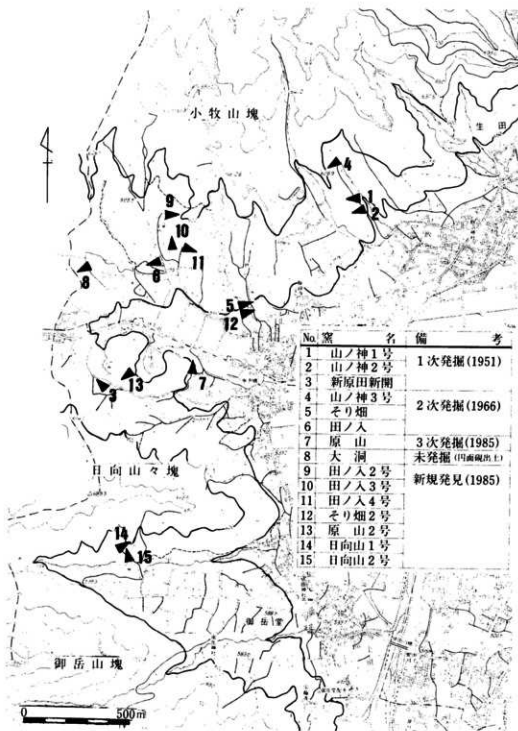
そのため、戦後、元依田川中学校教諭土屋保男氏によってこの地域一帯に窯址が発見されるまでは、歴史的にさほど重要な所とは考えられていなかったといえる。

しかし、この発見を機に、国府・国分寺に直結する重要な窯址が存在するところとしてむかひにクローズアップされ、昭和26年には小県資料編纂会から依頼を受けた東京大学考古学研究室、吉田章一郎・倉田芳郎・五十嵐幹雄氏らによる第1次発掘調査、昭和41年には丸子町教育委員会から依頼を受けた大川清・宮下真澄氏らによる第2次発掘調査が行われ、県内における窯址発掘のはりしとして注目を浴びてきた。

人々が住むに適さないやせた土山は古窯の設置に、なだらかに続く山地は尾根伝いに国分寺などに製品を運ぶのに絶好の条件となり、この窯址群の解明をすることがこの地方の歴史解明の重要な鍵となったのである。

現時点における依田古窯の分布は、第16図のとおりである。このうち今回の原山窯址を含めて発掘調査が実施されているのは7基⁽⁸¹⁾である。窯の分布は北の小牧山塊に多く、南の日向山々塊に少ないが、これは山地の大きさによるものであろう。

従来、依田古窯址群に属する窯は、丸子町生田の北原から飯沼にかけての（小牧山塊南麓の）山腹と、御岳堂の南原の（日向山々塊北麓の）山腹に集中的に存在すると考えられていた。しかし、地質や立地条件の酷似する小牧山塊西麓・上田市塩田側や、北麓・上田市諏訪形・小牧地区、また日向山々塊の東・西・南麓にも窯址の存在する可能性が高いと推定していたが、はからずも本年11月に実施した丸子町誌関連分布調査⁽⁸²⁾において日向山々塊南麓にも窯



第16図 依田古窯址分布図 第2表 依田古窯址名一覧表

址の存在することが明らかとなり、また、上田市国分寺資料館と共同で行った、上田市側の窯址確認調査によっても、砂原峠のむこう、塩田側にまで窯址の存在することが確認された⁽⁸³⁾。今後、更に集中的に確認調査のメスが入られる予定もあり、窯址の存在範囲・数が飛躍的に増大する可能性も高い。

さて、依田地区における窯址の立地条件は、多少のばらつきはあるが、煙道部上部がおおよそ標高600m～550mの間で、付近に沢もしくは湿地（溜池の可能性もある）などの水の便のよいところに集中するようである。駒沢大学教授倉田芳郎氏によると、古窯址群の窯址は、同じ時期でも窯構造・焚き口の標高はまちまちであるが、煙道上部の標高はほぼ一定しているというが、依田古窯址の場合も、標高600m付近の山ノ神3号窯を上限として、約50mの標高差の中に集中するようである。

3 依田窯址成立の背景

さて、ここで依田窯址成立の背景についてふれてみたい。なぜなら、その点を明らかにすることから、依田窯址群の存在した時期のおおむねの目安を導き出すことができると考えられるからである。

県内では、今のところ木曾を除く各所で須恵窯や瓦窯が発見されているが、これらの窯の成立年代は、627年の壬申の乱後本格的に整え始められた律令体制の確立と歩調を併せるかのようになり、8世紀以降のものが圧倒的多数である。もちろん、6世紀前半と推定される長野市松ノ山窯⁽⁸⁴⁾の存在もあり、5世紀中頃に大阪の陶邑で始まったと考えられる須恵器生産が、5世紀後半には東山を始めとする東海地方に、6世紀前半には北武蔵の桜山を始めとする関東地方に伝播していったことを考えると⁽⁸⁵⁾、長野県にも当然早くから伝播していても不思議ではないのであるが、今のところ松ノ山窯以降、7世紀中頃までの窯の存在はまったく知られていない⁽⁸⁶⁾。

さて、信濃国府が始めて置かれ、国分寺・国分尼寺が置かれたのは上田・小県地方である。今のところ国府所在地は定かでないが、現・上田市国分地籍にあった国分寺・国分尼寺とそう遠くないところにあったのは確かであろう。依田古窯址群はこの国分寺・国分尼寺とごく近距離、千曲川を隔てた対岸の小牧山塊におもに立地する。当然これとの関連を無視しては考えられないと思われるのである。

これらの寺院や国衙を建立する場合、大量の瓦と須恵器を必要とし、そのためこの時期、瓦や須恵器生産が全国的に広がるのであるが、これらの生産には国家の徴税体系と連動した統制が強くはたらいていたものと考えられている⁽⁸⁷⁾。現在のように、各人が自由に生産できる状況ではなかったのである。そう考えると、文字通り信濃の政治・経済の中心地であった上田周辺の窯は、特定の系統と意図をもって統制されていたものとみるべきであり、依田古窯址の成

立・存続もこの統制と無縁ではない。

さて、この時期の瓦や須恵器の伝播に関して注目すべき史実がある。それは陶邑編年Ⅳ型式1段階、すなわち8世紀の第1四半期に、「美濃」「美濃国」の刻印・ヘラ描きを有する須恵器を生産した美濃須恵古窯址群、朝倉・老洞古窯⁽⁸⁸⁾をも統治した、当時の美濃国司笠朝臣麻呂⁽⁸⁹⁾が、同時に信濃・尾張・三河の介(副官)としても勢力をふるったという点である。東海地方の須恵器や瓷器生産に深く関与したと思われるこの副官の存在は、信州での本格的須恵器生産の開始時期や生産技術の流れを考えるうえで極めて重要であると思われる。

次に、依田古窯址群の存亡を考える上で忘れてはならないのが、信濃国府の移転問題であろう。この国府移転の理由・移転の時期については様々な説が存在し⁽⁹⁰⁾、どれが確かであるか判断でき得ないが、いずれにしろ8世紀末～9世紀の中頃の間に移転したことは間違いない。この国府移転が、依田古窯址群のみか、信濃の須恵器生産に当然大きな影響を与えたものと考えられるのである。

今のところ、県内各窯址の詳細な検討がなされていないので確かなことはいえないが、檜崎彰一氏が昭和60年度に調査した「信濃における灰軸陶器の分布」⁽⁹¹⁾を参考までに提示すると、東海地方で灰軸陶器が生産される最も早い段階、鳴海32号窯式(8世紀後半)に属する個体は、南信の上伊那と東信のみに見られ、産地は猿投と美濃須恵である。次の折戸10号窯式(9世紀前半)になると、松本盆地南部での出土が見られ、以後灰軸陶器終末の折戸53号窯式に至るまで次第に増加するのに対し、東信では鳴海32号窯式以降は折戸53号窯式に至るまで長い空白が続くのである。また、県下の灰軸陶器出土遺跡数に占める東信の割合は3.36%で、東海地方と接する伊那・木曾⁽⁹²⁾の比率が高いのは当然としても、松本盆地が南部(松本市周辺)26.1%と極端に高率なのに比し東信の低いのがめだつ。この結果からも国府の移転に伴う影響をうかがうことができるのである。

最後に、依田古窯址群と周辺窯址との関連についてふれなければならない。今のところ明確となっている東信地区の須恵器・瓦窯は、原山窯址を含む依田古窯址群と、若干距離はあるが、北佐久郡下、鹿曲川の兩岸の台地上に存在する御牧原窯址群と、北御牧村の八重原窯址群⁽⁹³⁾、埴科郡坂城町の南日名窯⁽⁹⁴⁾(2基)、上田市国分地籍の国分寺跡に隣接する国分寺瓦窯⁽⁹⁵⁾(2基)などがある。このうち、南日名窯及び国分寺瓦窯は瓦を焼成した窯で、御牧原窯址群には瓦を焼成した窯は知られておらず八重原は発掘された3基のうち2号窯が瓦を焼成した窯である。また、今のところ依田地区においては、瓦を窯体の補強に使った例はあっても瓦を焼成した例はない⁽⁹⁶⁾。

これらの窯の時期は、南日名窯及び国分寺瓦窯が出土した瓦をもとに、8世紀末～9世紀初頭に位置づけられている。瓦の対比を通して、国分寺・国分尼寺に瓦を供給したのは確かであるが、推定されている両寺の創建年代とずれがあることから、修理用の瓦を焼いたものと想定

されている。また、八重原窯は1号窯の舟底ビットの存在など、東海地方の影響を色濃く受けているが、須恵器生産形態から9世紀代と推定されており、その活動期は国府移転以降である。

こうしてみると、上田・小県地方に国府が置かれ、国分寺・国分尼寺が創建された8世紀代、最も瓦や須恵器を必要とした時期に生産活動を続けた窯は、今のところ依田古窯址群しかなく、そういった意味で重要である⁽⁹¹⁷⁾。しかし、再三ふれているように、瓦の存在があっても瓦を焼成した例がないこと、依田古窯址群所在地と同一の第三紀層に属する良質の粘土を産出する小牧山塊西麓から北麓などの詳細分布調査が未了のことなどから、今後の研究成果を期待しなければならない点も多い。

また、併せて丸子町の東山麓、八重原台地に連続する笠取山脈⁽⁹¹⁸⁾も第3紀層に属する良質な粘土を産出する⁽⁹¹⁹⁾ことから今後調査を進めなければならない地域の一つである。ことに上丸子の大挾間地籍⁽⁹²⁰⁾は、県下で最古と思われる鏡瓦⁽⁹²¹⁾を含む多くの瓦を出土し、国分尼寺所在地に比定されたこともあるところであるが、谷幅の狭長な押し出し地形の卓越したところであり、なんらかの建物があったというよりも、瓦窯があったと考えたほうがより実状に合致すると思われる。

4 窯址付近の土の特性（PL10）

窯址の立地原因・出土須恵器の検討などをする上で、窯址付近の土の特性を明らかにすることが重要と思われたので、昭和59年度市の町遺跡発掘調査時に実施したと同様、丸子町在住の陶芸愛好家・堀内正次氏に依頼して窯址付近の土の焼成テストを実施した。

テストに使用した土は、本来ならば原山窯址付近の土を使用すべきであったが、後述する遺跡の状態でふれられているとおり、工場団地造成工事に伴い窯址周辺が荒れていて、一部土の移動があったこと、焼成試験を実施しようと決断した時期が遅く、窯址上部に既に多量の土盛りが行われていたことなどに左右され、やむなく原沢谷の対岸・小牧山塊に属する未発掘の窯の大洞窯址付近の土を試料土に選定した。しかし、この付近の地質の基本資料である上田・小県誌自然篇の地質を執筆された山岸猪久馬氏の助言もあり、焼成結果は充分原山窯址付近の土の特性を類推することが可能である。

① 土の状態

大洞窯址は大池の北西に位置するが、近年の溜池改修工事に伴い、その下方部は湛水時には水没する。今回試料土を採取した位置は窯の右側・年の半分は水没している地点である。これは、作業の工程から考えて原料となる土は付近で採取したであろうと考えられること、水没しない煙道部付近は厚く腐蝕土が堆積し、下部の土が採取困難であるのに対し、採取地点は表土（腐蝕土）がすり鉢状の池底部に流下し、本来の土層がよく露出していることによる。

採取した土は粉碎し、水箪した上でよく練り、長さ10cmの棒状の粘土板を作成し焼成を試み

た。練った感触は、丸子町の東部山地（笠取山脈）箱壺池付近の粘土より一層しまりがあり、箱壺のそのややぶよぶよした感覚はまったくみられなかった。

② 焼成の状況

堀内正次氏の所有する灯油倒焰式の窯⁽ⁿ²⁰⁾（内径＝幅500mm、奥行450mm、高さ570mm）を用いて焼成した。焼成温度は1220度である。

③ 焼成の結果

焼成後のテストピースの長さは8.6cmで、収縮率は14%であった。窯の構造上の制約から酸化焰焼成であり、焼成後の色は土中の鉄分が酸化して艶のある黒褐色を呈し、金属的な打音を発するほど固く焼き締まっている。へたりは最高のテストピース中央部で約5mmであった。

随所に玉状の茶褐色の吹き出しが見られるが、これは水簾が不十分なため、水簾を充分に行い不純物を除去すれば吹き出しはなくなるというのは、永年地元の土を使って陶芸を続けられている堀内氏の見解である。

さて、過年度相次いで実施したこの地方の土の焼成試験の結果をあわせ、窯址付近の土の特性を述べると、高火度焼成により黒褐色に焼き締まってへたり易い、鉄分の多い、典型的な信州の土であることは確かであるが、箱壺池周辺の土より若干耐火性が強いというように、微細な違いは見られるようである。

今回の焼成試験を通じ改めて再認識したのは、古代の工人達が実によく土の特性を知っていたという点である。原山窯出土の須恵器には、胎土の極めて緻密なものと比較的粗いものがあるが、粗いものでさえ不純物の吹き出しが見られるのは極わずかで、それも極小である。このことは実にいいに水簾した土を使用したことの裏付けになろう。

また、現代に比し実に効率の悪い窯を使いながら極めて薄作りの坏・坏蓋・盤や、厚手の甕や壺を焼成しあげている。私は、江戸後期以降一斉に開窯した信州の近世陶磁窯のあらかたが庶民の日常雑器を生産せざるを得なかったのは、鉄分が多く焼きべたりのする信州の土の特性に左右された点が多いと考えているが、それよりさらに遡る古代工人の技に驚嘆せざるを得ない。

II 遺跡の状態

原山窯はすでに述べたとおり、丸子町宮原山工業団地造成工事中に発見された窯である。数10トンという大型重機で山を平らにならす大規模な工事に伴い、既に発見時には窯の下方、すなわち焼成部の大半と燃焼部、焚口や灰原は削りとられ失われていた。また、表土も削りとられており、人工的に開削された谷の対岸に、スサ痕の残る窯体や比較的大きな須恵器破片が多く見られたほか、相等広い範囲に遺物の散布が見られ、工事に伴って付近の土の大幅な移動の行われたことを示唆している。

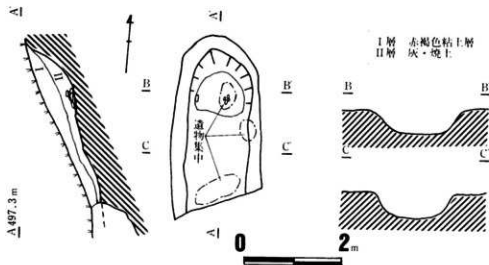
依田地区の他の窯の例から想像するに、同時代の平地に存在する遺跡にくらべ、窯址の上部に堆積した表土は薄かったはずである。このことは、本年11月に実施された町誌関連調査で発見された7基の窯すべてに共通しているし、過去の調査の報告書からも想像がつくのであるが、この表土層が失われていたのはもちろん、下部土層の大部分も失われ、残存していたのはごくわずかであった。

そのため今回の調査によって窯構造の全貌を明らかにすることは到底できなかったが、窯の上方部、煙道部を中心とした遺構の検出ができたのは幸いであった。ことにこれまでの発掘調査により、依田窯址群には煙道部の異なる2タイプの窯の存在が知られており、今後各窯の構造上の検討をするうえで重要な手がかりを与えることとなった。

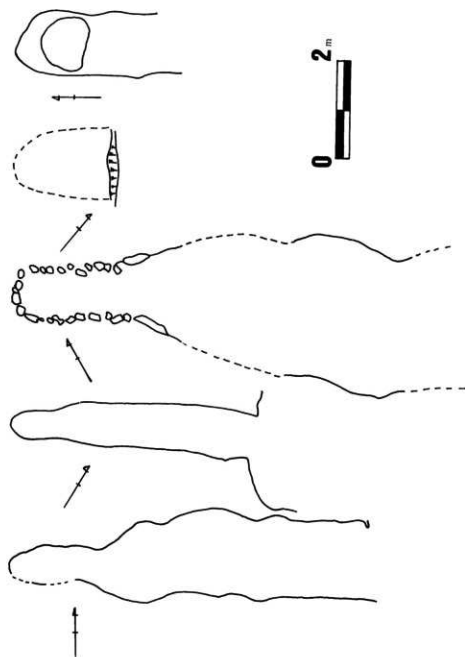
III 遺 構

一部のみの発掘調査でありその全体像は明確ではないが、半地下室の登窯（窯室）であったと推察され、現存した窯上方部は、全長3.4m、幅1.2mで、現存壁高20～60cmを有し、平均傾斜角は約20度で、主軸方位はN-87°-Eであった。また窯最上部、焼成部と煙道の接点に、たて0.9m×横1m×深さ0.15mのピットが存在した。窯の天井部は落下したうえ工事で一部削りとられており、本来の高さを想定することはできなかった。

わずかに残された窯内部及び付近に散乱した生産遺物は須恵器であり、その詳細は後章の記述のとおりであるが、純粋に須恵窯であると考えられる。遺跡の状態でふれられているように焼成部の大半と燃焼部、焚口や灰原及び上部土層の一部が失われており、遺構内からの窯体の



第17図 原山窯址実測図



原田室

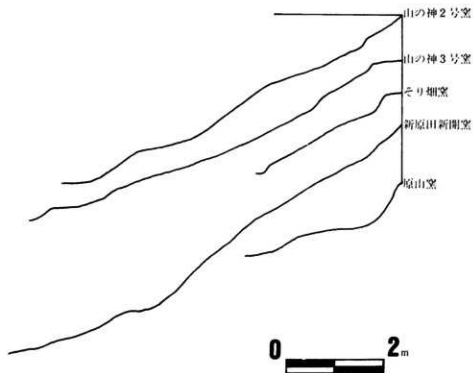
磯の細室

新原田新開室

山の神3号室

山の神2号室

第18図 依田黨址群集平面比較



第19図 依田窯址群窯断面比較

出土は比較的少なかった。須恵器はビット以下の窯内全体から出土したが、特に集中しているところが3カ所あり、うちビット内を除く2カ所は、盤・坏・坏蓋を主体とした小型品が出土しているのに対し、ビット内からは壊破片が出土しており、ビットの性格を考察する上で重要な手がかりを与えている。

このビットは、これまでに発掘された依田地区の他の窯址にはまったく見られないもので、陶邑で6～7世紀に成立した窯、猿投を中心とした東海地方の窯で8～9世紀にかけて盛んに使われている舟底ビット⁽ⁿ²¹⁾と似た性格を有しているものとも考えられる。今のところ県内各地に分布する古代窯址のなかで、この舟底ビットと想定されるビットを持つものは、同じ東信地区に属し距離的にも近い、北佐久郡北御牧村八重原1号窯址⁽ⁿ²²⁾のみである。しかし陶邑や猿投を中心とした東海地方の窯・八重原1号窯の舟底ビットが、おおむね燃焼部と焼成部の接点付近に設けられているのに対し、原山窯のそれは焼成部と煙道との接点付近に設けられているという差異があり、舟底ビットと呼称してよいか疑問もあるので、舟底ビット状遺構と呼んでいる。

次に、原山窯の性格をより一層明確にするために、依田地区の他の窯址との構造の比較検討

を試みた。原山窯址を含む依田古窯址群の中で、現在まで発掘調査が行われたものは7基^(a23)であるが、うち遺構が残る窯の実測図が残されているものは、原山窯を含めて5基である。同一縮尺に統一した実測図(第18・19図)で検討すると、窯の大きさ・構造・方向はまちまちであり一定していない。例えば、山ノ神2・3号窯、新原田新開窯は煙道部が細くくびれ、丸味を帯びた、そり畑・原山窯と対照をなすが、その大きさ・構造・方向は異なる。同様にそり畑と原山窯は、ともにその上方部しか残存せず、確かなことはいえないが、平面プランが極めて類似しているにもかかわらず、舟底ビット状遺構の有無・傾斜角・窯の方向・出土遺物などに異なりを見せるのである。

このような窯の差異は、窯を築く技術に直結するものといえようが、技術の進歩には一定の時間とステップが必ず存在するものと考ええると、この地域にある一定期間窯が存続したのは確実と考えられよう。本年に至って新窯がどんどん発見され、今後更に数や存在地域が拡大する可能性が高まっていることは前述したが、例えば瀬戸において西から東へと窯が順次移動し、越前において東から西へと円を描くように窯が移動していったと同様、この地域においても窯の存続した期間内、ある一定の法則をもって窯が移動した可能性も考えられるのである。そういった意味で、今後の研究に期待される点が多い。

IV 遺 物

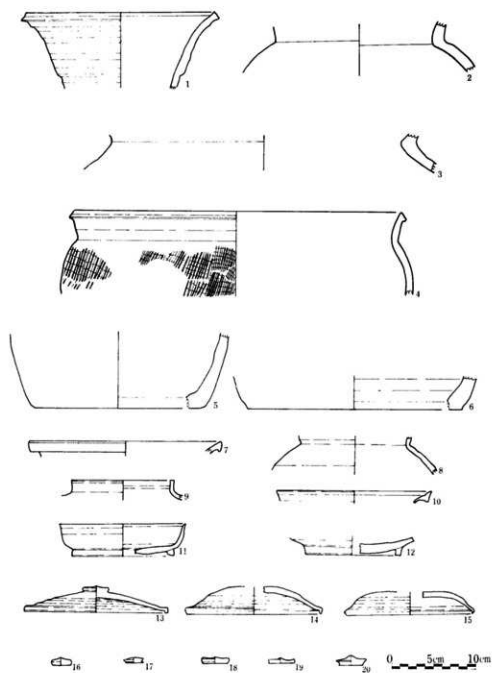
原山窯址から出土した遺物は、窯体や炭を除くと須恵器のみで、瓦の出土はまったくなかった。須恵器の器種には、坏・高台付坏・坏蓋・盤・甕・壺などがみられ、坏・坏蓋・盤などの薄手の須恵器の個体数が多く、甕などの厚手の須恵器の個体数は少なかった。個体数は坏が一番多く、盤、坏蓋がそれに続く。

① 甕(PL10・5～8、11・1、第20図1～6)

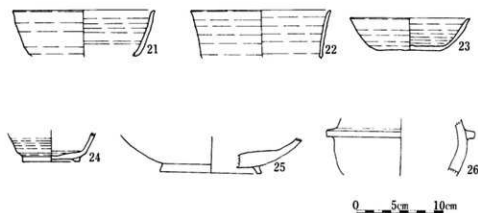
完形はまったくなく、すべて破片であった。破片は口縁及び口頸部・胴部・底部に分類可能で、胴部破片が最も多く、底部破片が最も少ない。

口縁及び口頸部には4ないし5種類あり、口頸部がラッパ状に開くもの(PL10甕1、第20図1)は、外面に漆黒の釉がかかって幅1cm内外の轆轤痕を有し、内面はタタキ目もなく滑らかに成形されているが、黄褐色の灰をかぶり、ザラザラした手ざわりである。口径は22.3cmで、均一な赤味をおびた胎土を有し、厚手で他の口縁・口頸部破片に比し成形もていねいである。下部はまったく不明であるが、その形態から関東の須恵器編年Ⅲ期後半以降に見られる広口の甕と同様な姿が想像し得る。1個体分が出土したがそれぞれの破片の出土地点はさまざまで、舟底ビット状遺構内から窯の下部にむけて破片が散在していた。

また、口頸部直下に平行タタキ目を有するタイプの甕は2種類出土した。推定されるこれらの器形には大きな差があり、そのうちの1つ(PL10甕2、第20図4)は、口径38.3cmで、外



第20图 原山窑址出土遗物实测图1)



第21図 原山窯址出土遺物実測図2)

面の口縁・口頸部はロクロナデ、その直下にタタキ目がある。内面はヨコナデが主体であるが、随所に圧痕が見られる。もう1つのタイプ（PL10壺3）は急激に外反する頸部直下にタタキ目があり、内面にはヨコナデの跡が明瞭に残る。双方ともネズミ色を呈し、胎土はやや赤味を帯びるが、前者の方が後者に比して成形・胎土とも良好であった。後者は焼きべたって極度にゆがんでおり、図化困難であると同時に、依田付近のよく水蔵していない土を使ったとき出現する、不純物の吹き出しが顕著に見られた。前者は窯内部に破片が散在していたが、後者は窯外、人工谷の対岸より出土した。

無文の、頸部のみの破片は2点（PL10壺4）見られた。うち1点（第20図2）は頸部径が19.7cmで、後者に比し外反がすくなく、残りの1点（第20図3）は頸部径が35.8cmで、ともに小破片で全体の形を想像することはできない。2点とも焼成は良好で、内外面ともロクロナデが施されており、そこに暗緑色の自然釉が付着していた。後者は窯内から出土したが前者の出土地点は不明である。

次に、最も多い胴部破片（PL10・1）は、平行タタキ目を有するものがほとんどである。山ノ神2号窯出土遺物に見られるような格子目のタタキ文を有するものはまったくなく、無文のものが数片まじる。また、内面にも外面と同様の平行タタキ目と思われる文様を有する破片も2点存在したが、残りは押さえたのみで叩いた痕跡は見られない。厳密に区分することは不可能であるが、胎土がきめ細かく赤味をおびるものは比較的成形がよいで、やや粗く灰色を呈するものは比較的成形が悪いように思われる。

さて、壺底部の破片と思われるものは2点のみ認められた。うち1点（第20図5）は底径20.6cmで、胴部外面には平行タタキ目、内部は粗い回転ナデが施されている。底部からの立ち上りの角度は約70度で、焼成の状態はよくない。またもう1点（第20図6）は底径が25.4cm

で、胴部内外面の成形は前者と同様であるが、自然釉の付着していない外面には不純物の吹き出しが顕著に認められる。底部からの立ち上がりの角度は約60°であった。出土位置は前者が焼成部、後者が舟底ビット状遺構内である。

② 壺 (P L11・2、第20図7～10)

壺と同様完形はまったくなく、壺と想定できる破片は口縁及び口頸部のみ4種5点存在した。第20図7は口径22.8cmで、口径18.4cmの第20図10同様、極度に外反し、口縁部に緑帯をもつ。全体の器形はまったく不明であるが、県内他窯址出土遺物、畿内・東海・関東などの須恵器編年表などを参考に考えると、頸部が長く、ラッパ状に開く口を有する、長頸壺となる可能性が高い。そういった意味でこの2点は共通性があるが、口縁部の形態には微妙な差もみられる。

また、第20図9は口径12.2cmで、肩部から約1.5cmの頸部がほぼ垂直に立ち上がり、短頸壺になるものと考えられる。同様に第20図8も、口縁部は欠けて不明であるが短頸壺となる可能性が高い。しかし双方には、口頸部の立ち上がりの角度、形に明瞭な差も認められる。

これら4種の壺と想定される破片は、壺に比して薄手で、内・外面ともロクロナデ調整が施され、若干の砂粒を含むが胎土も比較的良好と認められるが、内・外面に自然釉の付着が多く見られる。5片のうち遺構内から出土したのは2片で、第20図8及び9であるが、残存した窯の遺構の下方、燃焼部からの出土であった。

③ 盤 (P L11・3、4、6、第20図11・12)

盤は坏に次いで個体数が多かった。成形のよいものと比較的確なものがあり、胎土が緻密なものは成形もよく、黒色の粒子(不純物の吹き出し)の顕著に見られるものは比較的確成形も悪いように思える。自然釉の付着するものは極めてわずかで、赤味を呈したものが多く、ねずみ色を呈したものが少ない。盤が燃焼部上部に比較集中して出土していることからくる特徴であろうか。

完形はまったくなかったが、図上復元の可能なものが多数ある。これらを区分する最も有効な観点は高台部で、角度・幅・取付位置などの差から7種に区分が可能であるが、基本的には第20図11と12に代表される2形態に集約される。前者が大部分で、後者に属するものは極めてわずかである。また、全体を通していえる特徴としては、薄手であること、胴部の立ち上がりが曲線的でなく、直線的に角度をもって立ち上がる点があげられよう。

器形の成形は轆轤ナデ調整をした後、回転ヘラ切り及び静止ヘラ切りで底部を切り離している。轆轤回転は右が多いが、これは依田古窯址群の他の調査済の窯の傾向と同様である。高台は外反するものが多く、本体と高台の接合部分が粗いものも少数見上げられるが、大半はよくナデ調整がなされていて、胴部下部から高台にかけて特に意識的にナデ調整が行われているように思える。

なお、底部破片のうちの2点は、自然釉が底部に付着していた。安定感のある盤が窯内で焼

成中に反転することはまずないと思われるので、当初から上下逆に窯詰めされたものであろう。窯詰めの形態を推測する貴重な資料といえよう。

④ 坏蓋（P L 11・5、7～9、P L 12・7、8、第20図13～20）

盤に次いで個体数が多かった。胎土・成形とも、粗雑なものと比較的良好なもの2通り見られる。焼成の具合は、赤味をおびたものとねずみ色を呈したものとがあり、赤味をおびたものは少数ではあるが、比較的良好に近いものが多かった。煙道部に近い、遺構の残存部からの出土例が多いことからくる特徴であろうか。また、ねずみ色を呈したものは、黒い粒子の混入が極だったものと、比較的良好な胎土を有するものとに2極分化する。前者が成形が比較的良好なのにに対し、後者は成形は良好である。なお、前述した赤味をおびたものは比較的良好な胎土が緻密で成形も良好である。

さて、出土した坏蓋の底径の推測可能なものを集めて検討をしたところ、底径は若干の増減はあるが、おおむね18cm内外で統一されていて、後述する高台付坏になろうかと思われるものと合致するほか、盤とも合致する。

出土した坏蓋の器型は、P L 11・5及び7、第20図13～15に掲げた3種に大別が可能である。このうち最も多いのは第20図14のタイプで、他のタイプの個体数は極めて少ない。この最も多いタイプの坏蓋は、依田古窯址群山ノ神3号窯からも出土している。

また坏蓋は、推定される窯の時期及び出土遺物の状態から考えて、いずれも宝珠をもっていただと想定されるが、その宝珠形にはP L 11・8及び第20図16～20で掲げた5種類がある。このうち最も多いのは第20図18のタイプで、この宝珠は今のところ、最も多い器形第20図14（代表例—P L 11・9）及び第20図12に伴うことがわかっている。宝珠形は、先端がとがること、平べったく安定感があることといった共通点を有するが、これは既に発掘された依田古窯址群山ノ神1～3号窯、そり畑窯とも共通する。最も多い第20図18のタイプ以外の出土点数はごくわずかで、なかには1点しかないものも含まれている。

坏蓋の外表面は轆轤ナデが施されており、切り離しは回転ヘラ切りによる。この轆轤の回転方向は盤・坏と同様に右が主体で、他の依田古窯址群の窯址出土須恵器（薄手）の傾向と合致する。原山窯址出土のもの比率は出していないが、参考までに例を掲げると、新原田新開窯では右が40に対し左が3、山ノ神2号窯では右7に対し左1の割合である。

⑤ 坏（P L 12・1～4、第20図21～24）

出土した須恵器の中で最も個体数が多いのが坏であった。しかし、全体に薄づくりで、そのほとんどが底部と口縁に分離して微小破片で出土しており、図上復元が可能なものはわずかしかなかった。

胎土が緻密なものと比較的良好なものとあり、粗いものが多く、これには黒い粒子が混入する率が高い。また成形も比較的良好なもの粗雑なものがあり、総体的に粗雑なものが多い。ま

た色は、赤味をおびるもの、ネズミ色を呈するもの、外面に漆黒の自然釉のかかるもの、同じく外面に黄褐色の自然釉がまだらにかかるものなど、まちまちであるが、概して高台のない坏はネズミ色に焼成されている例が多いように思える。これらはみな、水びき轆轤成形で作られており、轆轤回転は右が多い。

坏の器形は今のところ4種類の想定が可能である。小型坏が2種類と大型坏が2種類で、小型坏には無高台のもの（第20図23）と、高台付のもの（第20図24）がある。高台付の小型坏は唯一点のみの出土であるが、無高台の小型坏は出土数が多い。無高台の小型坏の底部破片も多く、これらは圧倒的にへら切りが多いが、微小破片4片のみに糸切痕もみられる。底部の接地面が大きく全体に薄づくりで、同様の器形は依田古窯址群山ノ神3号窯、そり畑窯にも見られるが、底部が厚く接地面の少ない山ノ神1号窯出土の坏とは明瞭な異なりをみせる。また今のところ高台付の小型坏は依田古窯址群の窯址からの出土例はこの1点のみである。

次に大型坏はすべて底部と胴部の境で割れており、全器形を図上復元することは不可能であったが、残された破片の形から、より外反の強い第20図22のタイプと、同・21のタイプの2種類が認められた。これらの口径はおおむね16cm内外で、これはほぼ盤の口径と一致すると同時に、杯蓋とも対応する。しかし盤とは異なり、約2cm程深い点で異なっている。この大型の坏に高台があるか否かを実証する資料はないが、山ノ神3号窯などとの比較や、推定される底部の大きさに相等する無高台の坏底部破片がまったくないことから、この大型坏の底部には高台がついていたものと想像できる。しかし、この坏底部の大きさが盤底部と類似することもあり、出土している高台付の底部が、坏のものか盤のものかは判断がつかない。そのため、前述した盤底部の一部が坏のものとなる可能性もあることを明示しておきたい。

⑥ その他（P L12・5、6、第20図25・26）

出土遺物は、この地方の遺跡から出土する須恵器の標識になるであろうということも勘案して、総合的に判断し、できうる限り器種の特定を試みたが、器種の判断のつかない遺物もなお存在した。うち1点は底部破片（第20図25）で、当初後述する第20図26と同様の隆帯をもつ胴部破片と考えたが、詳細な検討の結果底部破片と判明した。その大ききから壺の底部とも思われるが、断言はしない。

また、隆帯をもつ厚手の破片（P L12・5、第20図26）も1片のみ存在した。その厚さから見て甕か壺の破片と思われ、底部破片と見えないこともないが、外面の隆帯の上部一方にのみ自然釉がかかることから胴部破片と考えられる。依田古窯址群の他の窯からの類似遺物の出土はまったくなく、今のところ県内から出土している胴部に隆帯をもつ壺もしくは甕は、中部山岳地帯にのみ見られるといわれる広口四耳壺⁽⁸²⁴⁾であるが、これらの広口四耳壺の代表例、佐久市伴野・依石遺跡、上田市下堀・西沖遺跡、飯田市座光寺・恒川遺跡出土のものと比較すると、これらが比較的薄手で隆帯の盛り上がりもわずかで、隆帯断面が三角状なのに対し、原山

窯出土のそれは厚手で、隆帯の盛り上がりも多く、隆帯断面も四角に近い点で異なりを見せる。そして今のところ広口四耳壺は、10～11世紀代に比定されている^(M25)が、この微小破片が広口四耳壺の破片となるならば、原山窯の出土遺物全般から現在推定している窯存在時期と大幅なずれ、約100～200年のへだたりを生じる。いずれにしろ、微小破片1点のみの出土であり、詳しい考察は不可能である。

注

- 1 1次調査は、吉田章一郎・倉田芳郎・五十嵐幹雄 1954「長野県小県郡依田村に於ける窯址の調査」(「信濃」昭和29年2月号)及び小県誌資料編纂会 1952「新原田新開須恵窯址発掘概報」を、2次調査は、大川清・宮下真澄 1966「長野県小県郡丸子町の窯址」(「信濃」昭和41年12月号)を参照のこと。また、報告書に掲げてない実測図の一部は丸子町郷土博物館で保管している。
- 2 新たに7基の窯址が確認された。一つの沢ごとに確実に窯があるようであり、時間・経費の関係で予想範囲のごく一部しか調査しておらず、更に増加するのは確実である。なお、この調査において日向山々塊南麓で2基の窯址を確認した。
- 3 丸子町に連続する小牧山塊西麓のごく一部の調査にとどまったが、ほぼ完全な状態で現存する全長11m以上の地下式登窯を含む3基の窯址が確認された。今後詳細な調査が実施されるに伴い、増加するのは確実であろう。
- 4 笹沢浩 1983「松ノ山窯跡」(「長野県史」考古編)P.426 参照のこと。本報告は未完である。
- 5 日本の須恵器生産技術の伝播に関しては、従来、陶器窯の技術伝播によるものと考えられてきたが、最近この陶器窯一元説に疑問も起こり始めている。詳しくは横崎彰一「日本古代の土器・陶器」(小学館「世界陶磁全集」2 P.138)参照のこと。
- 6 今後、この空白期の須恵窯が発見される可能性がなくもないが、あったとしても後期古墳の隆盛にもかかわらず、石室内からの須恵器の出土例が少ないこと、須恵器を模倣した土師器の例が多いことなど、この時期の消費遺跡からの須恵器出土状況と考え併せると、ごくわずかなものとなる可能性が極めて強い。
- 7 門脇慎二「日本古代の社会と文化」(小学館「世界陶磁全集」2)など参照のこと。
- 8 岐阜市教育委員会 1979「老洞古窯跡群発掘調査概報」など参照のこと。
- 9 天平宝字5年(761)副官=介^{ツノ}に任じられた従五位下紀朝臣僧麻呂がこれにあたると思われる。柴垣勇夫「東海の須恵器」(小学館「世界陶磁全集」2 P.183)など参照のこと。
- 10 小県上田教育会 1980「上田小県誌」第一巻歴史篇上(二)P.50～53参照のこと。
- 11 信濃教育会 1985「地方史臨地講習会テキスト」表1～8参照のこと。

- 12 この時代の本曾は、信濃ではなく美濃国に属していた。
- 13 坂詰秀一 1983「八重原窯跡」(『長野県史』考古編)P.815) 参照のこと。
- 14 報告書未完。
- 15 上田市教育委員会 1967「信濃国分寺跡」第三次発掘調査概報、上田市国分寺資料館「展示解説」P.35～参照のこと。
- 16 依田古窯址群のなかで布目瓦の出土のある窯址は、新原田新開窯、田ノ入1・3号窯の3カ所のみで、新原田新開窯は発掘調査の結果、瓦を窯体の補強に使ってはいるが、瓦を焼いた形跡のないことが明らかにされた。田ノ入1号窯は原山窯と同じく、上方部のみの残存で、その全体像は窺うべくもないが、調査結果から推測するには、瓦窯となる可能性は低い。田ノ入3号窯の詳細は今のところ不明である。
- 17 しかし、後述するように未調査地域も多く残されており、今後新しい窯址の発見される可能性も残されている。
- 18 筆者が、丸子町教育委員会 1985「市の町・塩川条里的遺構遺跡」P.59に掲げた焼成試験のH・HGは、笠取山脈に属する土である。
- 19 過去、奈良国立博物館学芸課長稲垣晋也氏にこの瓦を鑑定してもらったが、鎧瓦1点のみ白鳳時代(県下最古)で、他の出土瓦はそれより明瞭に時代が下がるとのことであった。出土地点の明瞭な丸子町八日町・小林建樹氏所有の瓦も後世のもので、鎧瓦の出土地点や入手の経過が不明瞭なことから、この瓦のみ別の遺跡出土のものが混在した可能性もある。今回の、大挾間地籍を中心とした町誌関連調査の結果、窯址存在の可能性がより一層高まった。
- 20 この窯はやや小ぶりであるが、室内温度分布が一定しているという特性をもつ。
- 21 舟底ビットの性格については、瀬戸市歴史民俗資料館長宮石宗弘氏の著した「瀬戸市史」陶磁史篇2 P.82(4)、「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要1」P.109等参照のこと。
- 22 注13参照のこと。
- 23 この報告書を作成するにあたり、詳細な窯址対照表を作成したが、報告書には未掲載である。
- 24 笹沢浩「中部高地の須恵器」(小学館「世界陶磁全集」2)及び、上田市信濃国分寺資料館 1985「信濃の須恵器」P.55参照のこと。ただし他地域においても、例えば岡山县邑久古窯跡群でも肩部に隆帯をもった壺を生産したことが知られており、代表例は広口四耳壺と同様の広口をもつ須恵器双耳壺(岡山县邑久郡船町出土・岡山县立博物館)であるが、信州においても肩部に隆帯をもつ双耳壺などの焼かれた可能性もあり得る。
- 25 上田市国分寺資料館学芸員林和男氏の教示による。なお、この時代確定は伴出した関東様式の土師器でなされたが、時代の前後する可能性も大きいとのことである。

第5章 ま と め

発掘調査の成果については各章で述べられているとおりであるので、ここでは時代を追って若干の考察を試み、まとめとしたい。

1 太鼓岩遺跡・古免南遺跡

今回発掘調査を実施したこの両遺跡とも、極度の乏水地帯である塩川地区を流下する塩川沢添いに存在する。この流域は付近で最も早く人々が住みついたものといえ、これを裏付けるように縄文時代の遺跡が点在するが、稲作時代に入ってから、乏水性の高原性台地を水源とすることもあって水量が少なく、夏場の渇水期、すなわち水田耕作に最も水の必要な時期の絶対水量が不足することなどから開発が遅れ、流域における生産・居住空間も極めて小範囲に限定されていたものと想像がつく。

私はかねてよりこの流域に存在する遺跡に特に注意をしてきたが、それは付近に展開する平地、塩川面及び丑田原面上に存在したと考えられる塩河牧と、それに引き続き成立したと考えられる塩川条里の遺構に関連してであった。

つまり、塩川面上における唯一の居住適地であるこの流域には、牧に伴う人々の居住や、条里水田開拓に伴う人々の居住が考えられ、中世のこの付近の歴史解明の重要な鍵を握るものと考えられたのである。

今回の調査の詳細はすでに前述されているとおりで、太鼓岩遺跡についてはその遺跡の中心は発掘除外区域になっており、また古免南遺跡はすぐ北の位置に大遺跡である古免遺跡が存在していて、遺跡の全ぼうを全く明らかにし得たわけではない。むろん今回検出されたわずかな遺構と遺物だけで、これが直ちにこの付近の歴史解明の重要な資料となるわけではないが、太鼓岩遺跡においては羽釜のセットの出土や多数の土師器坏の出土、古免南遺跡においてはピット群の検出などが特筆すべき事項としてあげられ、全体像解明のための基礎的資料を積み上げたという点で評価されよう。

2 原山窯址

既にふれたように依田窯址群は、国府・国分寺と密接な関係をもっていたと考えられ、東海地方の影響を色濃く受けていたとも想像できるのであるが、だからといって東海地方で生産され移入された須恵器ならともかく、地元産・原山窯址の須恵器をそのまま東海地方の須恵器編年表にあてはめて時期を論ずるというわけにはいかないであろう。一定の時期この地方に須恵窯があったのは確かであり、最初東海系の技術が移入されたとしても、この地域で生産を続け

るうち、やがて様々な要因に影響されて地域的特色がうまれてくるはずであり、その地域性を無視してストレートに他地域の編年表に準じられるはずがないからである。今回、畿内・東海・関東の須恵器編年表と原山窯址の出土遺物を比較考察したが、ことさらその感を強くもった。

例えば坏蓋の形や宝珠の形をもって大まかな時期区分を考えるが、原山窯から出土した坏蓋は、原山窯が時期をおいて継続使用された形跡がないにもかかわらず、器形で3種、宝珠形で5種の出土があり、他地域の編年表にあてはめた場合、相当の期間に亘ることとなる。また、坏底部の切り離し技法をとって、ヘラ切り＝奈良時代、糸切り＝平安時代と短絡的に考える考え方もあるが、為政者がかわったからといって即、須恵器製作技術がかわるものでもなく、関東地方に端的に見られるように、技法の地域差が当然存在するものと考えられる。

こう考えると、依田古窯址群が存続した期間の須恵器の編年も、東海地方において猿投の編年を基準として、それに併行する形で尾北、美濃、美濃須衛などの編年が作られているのと同様に、併行する形で依田古窯址群独自の編年が作られていかなければならないと考えられる。この編年が作られてこそ初めて、付近の生活遺跡から出土する須恵器の確実な年代推定も可能となるのである。

今回の原山窯址の発掘調査は、この地元須恵器の編年を作成する上で、極めて貴重な資料を提供したといえるが、編年作成にはまだまだ資料が不足しており、原山窯址の時期確定は、今後依田古窯址群の研究が一層進み、窯相互の比較検討が行われ、地磁気測定による窯の時代の傍証や、消費遺跡出土遺物との対比などを通して依田古窯址全体の検討が進むまでたねばならないことができる。

私は原山窯の存在した期間は、今のところ8世紀後半代から9世紀初頭の間と考えており、今秋、原山窯址の出土遺物を実見した倉田芳郎氏も同様の見解を示しておられたが、この時期推定はあくまで総合的に判断した上で得た大まかなものであり、今後の研究の進展状況に応じて前後にずれる可能性もまったくないとはいえないうえ、もっと時期の幅の狭い、より確実なものとなる可能性が極めて大きいものである。

太鼓岩遺跡
古免南遺跡
原山窯址

——長野県小県郡丸子町太鼓岩・古免南・
原山窯址遺跡発掘調査報告書——

昭和61年3月15日 印刷・発行

編集 丸子町塩川地区埋蔵文化財発掘調査団

発行 丸子町教育委員会
〒386-04 長野県小県郡丸子町上丸子1592の2
TEL (0268)-42-3147

印刷 信教印刷株式会社
〒380 長野市旭町1098
TEL (0262)-34-3259
